

## 『保元物語』『平治物語』合戦譚の検証

早川厚一

### 一 『保元物語』の合戦譚

『愚管抄』によれば、保元の乱のおり、義朝や清盛等が、白川殿へ夜討をかけた合戦場面は、次のように記される。

・十一日ノ暁、「サラバ、トクヲイチラス候へ」トイ、イダサレタリケルニ……(義朝は)安芸守清盛ト手ヲワカチテ、三條内裏(早川注：高松殿が正しい)ヨリ中御門ヘヨセ参リケル。コノホカニハ源頼政・重成・光康ナド候ケリ。ホドヤハアルベキ、ホノくニヨセカケタリケルニ、頼賢・タメトモ勢ズクナニテ、ヒシトサ、ヘタリケルニハ、義朝ガ一ノラウドウ鎌田ノ次郎マサキヨハ、タビくカケカヘサレケレドモ、御方ノ勢ハカリナケレバ、ヨシマハシテ火カケテケレバ、新院ハ御ナヲシニテ御馬ニタテマツリテ、御馬ノシリニハムマノスケノブザネト云者ノリテ、仁和寺ノ御ムロノ宮エワタラセ給ヒケリ(旧大系二二一〜二二三頁)

『愚管抄』によれば、清盛や義朝等に勅命が下されたのは、保元元年七月十一日の「暁」の時であった。小林賢章<sup>1)</sup>によれば、「暁」とは、「午前三時が、日付変更時点であり、それ以降日の出まで」(五五)

五六頁)の時間帯を言う。故に、旧暦の七月十一日頃の「暁」の時間帯は、午前三時から日の出までの二時間強を指すことになろう。勅命を受けた清盛や義朝等の軍兵が白河殿に寄せ掛けたのは、『愚管抄』によれば、「ホノく」の頃とされる。また、『兵範記』十一日条によれば、「清盛朝臣、義朝、義康等、軍兵都六百余騎発、向白河」したのは、「鶏鳴」(増補史料大成2―117頁)の時という。

先ず、『兵範記』の記す「鶏鳴」とは、いつの時間帯を指すのか検討してみよう。『日本国語大辞典第二版』に、「鶏鳴」とは、「②一番鶏が鳴くころ。午前二時ごろ。丑の時。八つ時。③よあけ。あけがた」とあり、『角川古語大辞典』に、「②一番鶏が鳴く時刻。『推古紀』の十九年五月五日の条に、「(藥狝) 鶏鳴時を取りて藤原池の上に集ふ」とあり、岩崎文庫本では「鶏鳴時」に「アカツキ」と付訓している。「鶏鳴 ケイメイ(丑八つ時)」「下学集」とある。これらの辞典類によれば、「鶏鳴」とは、丑の時から夜明け方までの幅広い時間帯を指す言葉らしいのだが、『兵範記』に見る「鶏鳴」の頃とは、次に引く『中右記』や『玉葉』の用例により、明け方時分の時間帯を指すと解して良からう。

A 鶏鳴之後出<sup>二</sup>宿所<sup>一</sup>、行廿余町許過<sup>二</sup>篠田社<sup>一</sup>間、漢天已明、行路纒  
見<sup>二</sup>〔中右記〕天仁二年十一月八日条<sup>一</sup>

B 此曉鶏鳴之後地大震<sup>二</sup>〔中右記〕永久二年六月十九日条<sup>一</sup>

C 于時報<sup>二</sup>曉鐘及鶏鳴<sup>一</sup>〔玉葉〕文治三年九月十八日条

A では、鶏鳴の後二十余町行き過ぎた所で夜明けを迎えたとする。  
夜明け前三十分ほど前の時間帯を指そう。B の「曉鶏鳴」とは、曉の  
一部の時間帯が鶏鳴であることなる。C からは、明け方に近い時  
間帯が、鶏鳴となる。

では、義朝等が白河殿に攻め寄せたとされる『愚管抄』が記す「ホ  
ノク」の頃とは、いつの時間帯を指すのであろうか。『日本国語大  
辞典第二版』によれば、「ホノク」とは、「夜がわずかに明ける頃。  
早曉」、『角川古語大辞典』では、「夜が明け始めるころ」の意とする。  
以上からしても、「鶏鳴」「ホノク」のいずれも、夜明け方で、  
白々と明け初める頃の時間帯を言うと考えられる。

一方、『保元物語』諸本は合戦の時間帯をいつの頃のこととして記  
すのか確認してみよう。以下見るように、合戦を先ず夜軍とする点は  
変わらない。

半井本（新大系）

① 明レバ十一日、寅ノ剋ヲゾ定メタル（三九頁）

② 保元元年七月十一日寅剋ニ、新院ノ御所ニハ、「敵寄タリ」ト聞ケ  
レバ（四四頁）

③ 何トモ無寄スル程ニ、暗マギレニ不祥ニテコソ此門ヘハ寄当リタル  
（四九頁）

④ 八郎ノ矢ナラン、カヤウニ胄武者一人ヲバ通ランゾ。矢統ガ早フ

テ、暗サハ暗シ、ニヲ一トコソ見タルラメ（五〇頁）

合戦は寅の刻と定められ①、その時刻に天皇方は新院御所に攻  
め寄せたとする②。③は、為朝の陣に寄せた清盛が怖じ気づいて、  
他の陣へ引き下がるに際しての弁明。特にどの陣と言ったことなく寄せ  
たところ、暗さに紛れて運悪く為朝が守る門に寄せてしまったことよ  
の意。④からも、清盛とその郎等が寄せた一連の合戦は、暗がりの中  
での合戦とするのであろう③。

金刀比羅本（旧大系）

⑤ 比は七月十日の夜なりければ、月は夜半に入はて、曉闇の空なる  
に、賀茂河原に霧トて、京白河もみえず、東西のこともしらね共、  
敵の箒をしるべにて、思ひくにうつほどに、大炊御門西の河原  
にうち出たり（九五頁）

⑥ 只暗まぎれによりあたりたるにてこそあれ（一〇〇頁）

⑦ 抑今日十一日、寅剋也（一〇八頁）

⑧ 詞共のたゝかひすとて、立すかしたる内甲、夜のあるるに随て、  
白々とみゆれば（一〇九頁）

⑤ によれば、清盛・義朝等は、日付の変わる（寅の刻に変わる）前  
日十日の夜に出立したが、その時はまだ月は沈み真つ暗闇の中の進  
軍であったとする。⑥ は先の③に同じ。⑦ は、為朝と戦い這々の体で  
逃げ帰ってきた政清に、義朝が、「八郎におおては義朝一あてあてむ。  
いか計のことか有べき」（一〇八頁）と、手綱を控えて言った言葉。  
とすれば、為朝と政清との戦いは寅の刻前のこととするのだろう。暗  
がりの中での戦いということになるが、⑧ の為朝と義朝との戦闘場面  
では、夜があける頃で、義朝の顔が「白々」と見えたとする。

流布本(旧大系)

⑨十一日の寅刻に、官軍既に御所へをしよす(三五九頁)

⑩夜中なれば誰とはしらず、矢面に進だる者二騎射おとされぬ(三六一頁)

⑪「さもいはれたり。今は程なく夜も明なんぞ。然ば小勢に大勢が懸立られんもみぐるしかりなん。」とて引退く所に(三六一頁)

⑫夜明て後に傍輩の、八郎の、いで矢目見んといはんには、何とか其時答べき(三六三頁)

⑬さる程に夜もやうく明行に、主もなきはなれ馬、源氏の陣へ懸入たり(三六三頁)

⑨は②に同じ。⑩の西の河原での合戦では、夜中の合戦のため人の姿も誰とは見定めがたい程であった。しかし、為朝が守護する西門から北門へ清盛軍が退却する時には、⑪「今は程なく夜も明なんぞ」という頃であったし、続く為朝に打ち落とされた山田小三郎が乗っていた主もない馬が、源氏の陣を駆けめぐったのは夜も明け行く頃であった(⑫)。

以上からすれば、『保元物語』のいずれの諸本でも、寅の刻以前から夜明け頃にかけての合戦譚として描いていることが分かる。以上を図示すれば次のようになる。「半」は、半井本を、「金」は金刀比羅本を、「流」は流布本を指す。

寅の刻以前	金⑤、金⑥
寅の刻	半①、半②、金⑦、流⑨
寅の刻以後	半③、半④、流⑩
夜明け前	流⑪、流⑫

夜明け 金⑧、流⑬

とすれば、半井本や金刀比羅本で、自分をめがけて矢を射掛けようとする山田小三郎を見て、為朝が、次のように考えたとするのも、その合戦が暗闇に近い中で行われたことを前提とするからであろう。

⑭如何せんズル。定テキヤツラハ引マウケテハ待ランナ。為朝程ノ者ヲ取テ懸ハ、手本ノ覚ル者ニテ、音ニ付テ、内甲ヲネラウラン。一ノ矢ハ、アヤツニ射セツト覚ル。二ノ矢ヲ射セデ、キヤツヲ射バヤト思(半井本五二〜五三頁)

⑮是ほどさかかはぬ奴なれば、弓を引まうけて、声に付て内甲をぞねらうらむ。あひ引しめてすきまを射られて嗚呼がまし。一の矢を射させて試みんとて、暫ためらひける所に(金刀比羅本一〇四頁)

傍線部に見るように、山田小三郎は為朝を一撃で倒すために、内甲を狙うに違いないと為朝は考えたとする。その際、なぜ「音ニ付テ(声に付て)」とするのか。それは、暗闇のため為朝の顔を目視できないため、声を手掛かりに内甲を狙うに違いないと為朝は考えたのである。対して、流布本が、そうした記事を記さないのは、⑪⑫⑬に見るように、清盛軍退却時には、間もなく夜が明けようとしていたし(⑪)、為朝に射落とされ今は主(山田小三郎)もなきはなれ馬が、源氏の陣に駆け入った時は「夜もやうく明行」時であったとするように、為朝と山田小三郎との一騎討ちは、夜明け前に行われたという設定のため、内甲の位置を声で確認する必要がないためだろう<sup>4)</sup>。

以上の検証からも明らかのように、『保元物語』は、合戦が寅の刻から夜明け方にかけて行われたとし、例えば為朝と山田小三郎との一騎討ちも、半井本や金刀比羅本では、暗闇の中でのこととし、内甲も

確認しえない程のこととするが、実際の合戦は夜明け方に近い頃に行われたと考えられる。内甲も確認し得ない夜陰の中での一騎討ちという趣向は、『保元物語』の為朝と山田小三郎との一騎討ち譚独自のものと考えられる。現に、それ以前にあった為朝と伊藤五郎・六郎との合戦譚では、③の記事で「暗マギレニ」とはするものの、夜陰の中で合戦という趣向は見せないことから明らかだろう。

さらに、冒頭に引いた『愚管抄』の記事「義朝ガ一ノラウドウ鎌田ノ次郎マサキヨハ、タビくカケカヘサレケレドモ、御方ノ勢ハカリナケレバ、ヨシマハシテ火カケテケレバ」によれば、鎌田次郎政清は、為朝の陣を何度も馬を駆け、攻め返したものの、その後は味方の多勢を頼んで、御所を取り囲んで火を掛けたとする。その点、『保元物語』では、為朝の左の顔先を政清の矢は射刺ったものの、手取りにせよとの為朝の言葉に恐れおののき、這々の体で、政清は、主人義朝のもとに逃げ帰っている。『愚管抄』によれば、『保元物語』に見るような、その後の為朝と兄義朝との一騎討ちの場面は、想定しがたいようにも読める。

また、『兵範記』保元元年七月六日条によれば、次のようである。

・左衛門尉平基盛、於「東山法住寺辺」、追「捕源親治男」、件男頼治孫、親弘男也、大和国有勢者竊住「京」、為「被」尋「由緒」也、左衛門雖「籠」居宇縣、「召」件親治「被」住「京」、尤有「疑」云々

これによれば、左衛門尉基盛が、東山の法住寺の辺りで、源親治を追捕したという。その親治は、大和国の「有勢」の者が、京に竊かに住んでいることを怪しまれ追捕されたという。まさに元木泰雄が指摘するように、「予防拘禁」であり、頼長一派に対する挑発と考えられ

よう。<sup>5)</sup>この点、『保元物語』では七月六日のこととする点は同じだが、大和国から上る宇野七郎親治一行と、宇治路を堅めに向かう平基盛一行とが、法性寺の辺りで遭遇し合戦に及んだとする。物語では、より劇的な場面構成となるように描き直していると考えられよう。

## 二 平治の乱の待賢門合戦の検証

『平治物語』に記される待賢門の合戦場面を詳細に検討したのが谷口耕一である。例えば、金刀比羅本で、義平と重盛とが、右近の橋、左近の桜、そして大庭の椋の木の中に立てて戦ったという合戦描写は、大庭が「北を春華門・建礼門・修明門、南を陰陽寮・中務省、東を西雅院、西を大極殿で囲まれた一区画」(五頁)であるように、全くあり得ない絵空事の合戦を描いていると指摘する。さらに、一類本『平治物語』の待賢門合戦を検証した谷口は、郁芳門と待賢門で何らかの合戦があったのは確かだが、一類本『平治物語』の待賢門合戦の細部の描写が史実に則ったものかという点、そうではないだろうという。例えば、待賢門の造作を考えると、待賢門の東西には三段の階段があり、門前には、幅二・四メートル程の空濠があり、その上には、橋が架かっていた。故に重盛率いる五百余騎が一団となって、「ぼつと」あるいは「さつと」待賢門を行き来することは考えがたい。しかし、信頼方は、空濠の上に架けられた橋を落としもせず、三間ある門扉の内の二間を閉じることもし、重盛が率いる五百余騎に易々と門を突破され、大庭の椋の木のもとまで攻め込まれたと描くのはなぜかと疑問を呈する。その理由として、谷口は、物語が、信頼の臆病と、

重盛の勇武を強調して描くための虚構であった可能性を指摘する。以上からしても、『平治物語』が記す重盛の大内裏内への進攻そのものは虚構の疑いが強く、その合戦描写は机上の創作と見てよいと指摘する。

確かに重盛の大内裏内への進攻記事は物語の虚構である可能性は大きいですが、だとすれば、郁芳門や待賢門ではどのような合戦が実際には繰り広げられたのだろうか。しかし、その合戦の詳細を記す一次資料は残されておらず、わずかに次のような、後世の編纂資料が見られるのみである。

・遣<sub>二</sub>官軍於大内<sub>一</sub>。追<sub>二</sub>討信頼卿已下輩<sub>一</sub>。官軍分散。信頼兵乗<sub>レ</sub>勝襲来。合<sub>二</sub>戦十六条河原<sub>一</sub>。信頼義朝等敗北。信頼至<sub>二</sub>于仁和寺<sub>一</sub>。  
……〔『百練抄』平治元年十二月二十六日条〕

・廿六日。遣<sub>二</sub>官軍於大内<sub>一</sub>追<sub>二</sub>討信頼卿已下<sub>一</sub>。官軍分散。信頼已下襲<sub>二</sub>来六条河原<sub>一</sub>合戦。不<sub>レ</sub>幾敗走〔『帝王編年記』平治元年十二月二十六日条〕

・同二十六日、於<sub>二</sub>大内裡<sub>一</sub>合戦。信頼義朝等追落了。〔『一代要記』平治元年十二月二十六日条〕

大内裏で合戦があったことを明確に記すのは、『一代要記』のみである。但し、その合戦で信頼・義朝等は敗退したかのように読めてしまう。『百練抄』『帝王編年記』は、記事の前半が一字一句まで重なる点注意されるが、両記事によれば、官軍の平家軍を大内裏に遣わし、信頼等を追討したところ、官軍はばらばらになって退散したため、信頼等は勝ちに乗じて襲撃し、六条河原で合戦に至ったが、信頼・義朝等は（間もなく）敗北したということになる。果たして、大内裏

に向かった官軍をばらばらにし退散させてしまう程の合戦がどの地であったのか、その合戦は『平治物語』が記すように、待賢門・郁芳門前での攻防戦であった可能性は高いと考えられるが、そうした記載は『平治物語』等からの影響も考えられ〔『百練抄』の成立は、十三世紀末、『帝王編年記』の成立は十四世紀末と考えられている）、歴史的事実を両史料が、どの程度反映させているのか、不明と言わざるをえない。その点、次に引く『愚管抄』の場合、どのように読むことができるのであろうか。

・カ、リケル程ニ内裏ニハ信頼・義朝・師仲、南殿ニテアブノ目ヌケタル如クニテアリケリ。後ニ師仲中納言申ケルハ、義朝ハ其時、信頼ヲ、「日本第一ノ不覚人ナリケル人ヲタノミテ、カ、ル事ヲシ出ツル」ト申ケルヲバ、少シモ物モエイハザリケリ。紫宸殿ノ大床ニ立テヨロヒトリテキケル時、ダイトケイノ唐櫃ノ小鈎かぎヲ守刀ニ付タリケルヲ、師仲ハ内侍所ノ御體ヲフトコロニ入テ持タリケル、「タベ、ソノ鈎コレニグシマイラセテモタン。ソノ刀ニツケテ無益ナリ」ト云ケレバ、「誠ニ」トテナゲオコセタリケレバ、取テ、「イヅチモ御身ヲハナレ申マジキゾ」トテ、アイズリノ直垂ヲ着タリケル。ヤガテ義朝ハ甲ノ緒ヲシメテ打出ケル。馬ノシリニウチグシテアリケレド、京ノ小路ニ入ニケル上ハ、散々ニウチワカレニケリ。サテ六波羅ヨリハヤガテ内裏ヘヨセケリ。義朝ハ又、「イカサマニモ六波羅ニテ尸ヲサラサン。」アテシテコン」トテヨセケリ。平氏ガ方ニハ左衛門佐重盛（清盛嫡男）・三河守頼盛（清盛堂弟）、コノ二人コソ大將軍ノ誠ニタ、カイハシタリケルハアリケレ。〔『愚管抄』二三四～二三五頁〕

二条天皇は六波羅に、幽閉していた後白河院も逃走したことを知った信頼・義朝・師仲等は、右往左往するばかりであったとする。義朝は、「日本第一ノ不覚人」の信頼に加担したことを今更ながら悔やみ、師仲は、信頼が鎧を着用しようとして、大刀契の唐櫃の鍵を自分の守り刀に付けようとしていたのを見つけ、そんな刀に付けても何の役にも立たないからと言うと、信頼が投げてよこしたという逸話が紹介された後、「ヤガテ義朝ハ甲ノ緒ヲシメテ打出ケル」とする。そんな師仲と信頼とのやり取りを横目に見ながら、義朝はすぐに胃の緒を締め、内裏から出て行ったとするのだが、問題は、その後、続く棒線部である。

・馬ノシリニウチグシテアリケレド、京ノ小路ニ入ニケル上ハ、散々ニウチワカレニケリ。

義朝の馬の後に従ったものの、京の小路に入った時には離ればなれになってしまったのは誰なのであろうか。大系本『愚管抄』の頭注では、「郎等は義朝の馬のあとについて」（二三四頁）と解する。また、大隅和雄も、「郎等は義朝の馬のあとに続いたが、京の小路に入ってから離ればなれになってしまった」（二二八頁）と解するが、そうではなからう。郎等と離ればなれになってしまった義朝が、この後、六波羅から内裏に攻め寄せてきた重盛や頼盛等と優勢に戦えるわけがなからう。ここは、内裏に置き去りにされようとした信頼や師仲等であると考えられる。次に引く河内祥輔の解釈が当たっているように

・義朝は討死を覚悟し（「口」をさらさん）、合戦へと出陣する。信頼と師仲は義朝に引きずられ、義朝の後について内裏を出たが、京の街路に出たところで義朝の軍勢から離れ、それぞれに逃げたので

あった。（二五二―二五三頁）

続いて問題は、棒線部に続く波線部の解釈である。

・サテ六波羅ヨリハヤガテ内裏へヨセケリ。義朝ハ又、「イカサマニモ六波羅ニテ戸ヲサラサン。一アテシテコソ」トテヨセケリ。

義朝等が内裏を出た時、六波羅からは、重盛と頼盛が大將軍となり、内裏に寄せたという。一方、義朝もまた、なんとかして六波羅で一合戦して死にたいとの思いを持って寄せたという。内裏を出た義朝等と大内裏に寄せた六波羅勢が遭遇した地はどこなのであろうか。例えば、大系本『愚管抄』の補注五一―六二では、次のように記す。

・義朝が武装し郎等を伴って出陣したのは六波羅攻撃のためと思われるが、平家側の大内裏攻撃より前に行われたとは思われないので、この「馬ノシリニ」以下「ウチワカレニケリ」の文章は錯簡か、それとも著者慈円の事実誤認かもしれない。（四七九頁）

しかし、文章の錯簡でもなく、著者慈円の事実誤認でもなからう。むしろ、「平家側の大内裏攻撃より前に行われたとは思われない」とする認識が誤りで、平家側の大内裏攻撃より前に、義朝・信頼・師仲等は、大内裏を後にしていた可能性がある。彼らはもはや、大内裏に籠もり、官軍の攻撃を待つ理由などなかった。主上や院という後楯を失った信頼・義朝軍にとって、大内裏に籠もって戦ったとしても、全く勝ち目のない戦いであった。主上や院がいてこそその籠城戦であろう。義朝には、この時一か八か、六波羅に突撃し、活路を開き、戦況によっては、東国に落ち、捲土重來を期すより方法が無かったのではないか。一方、信頼に戦意はなかった。義朝に続いた信頼や師仲等が、間もなく離ればなれになったのもそうした事情による。信頼には、後白河

院の御所三条殿を焼討にした上、後白河院を一品御書所に幽閉し院政を否定したにもかかわらず、事ここに至っては後白河院との関係修復の思いにとらわれていたのかもしれない。また、『愚管抄』で、師仲が内侍所を持ち出し、大刀契の唐櫃の鍵を信頼から取り上げたことを特記するのも、元木泰雄が指摘するように、終戦後、神器と交換に己の命の安全を手に入れようとの計算が働いていたとも考えられる<sup>9)</sup>。実際の合戦は、いち早く大内裏を飛び出した義朝軍等が、官軍を蹴散らし、六条河原（主戦場は、まさに六条河原であったのだ。『平治物語』の記す、六波羅合戦に相当しよう）にまで攻め込んだというのが実情ではないのか。『平治物語』が記す重盛の大内裏内への進攻そのものが虚構であったように、待賢門合戦そのものほとんど実体のない合戦であった可能性があるろう。主戦場は、あくまでも六条河原であったのだ。その点、この『愚管抄』記事を、次のように読み取る元木泰雄の見解は私にも心強い<sup>10)</sup>。

・『愚管抄』によると、義朝はすぐに京の町中に駆け込み、小路で郎等とも散り散りになったとあり、門で平氏側と交戦したか否かは疑問である。義朝にしてみれば、天皇不在でもぬけの殻となった内裏に固執する意味はなく、ひたすら六波羅に迫ったとする『愚管抄』の記述にしたがうべきであろう。したがって、待賢門などで華しい合戦が繰り広げられたとする『平治物語』の記述には、作為が窺われる。（二〇六頁）

### 三 『平治物語』諸本に見る「待賢門の軍の事」について

以下本章では、『平治物語』一類本と金刀比羅本との「待賢門の軍の事」がどのような合戦として描かれようとしたか、具体的に検証してみよう。

一類本によれば、合戦を前にして六波羅では公卿僉議があり、次のようなことが話し合われたという。

A王事、もろき事なければ、逆臣誅伐、時刻をやめぐらすべき。適新造の皇居、回祿あらば、朝家の御大事なるべし。その期にのぞみて、官軍、いつはりてしりぞかば、凶徒、さだめてすゝみ出んずらん。その時、官軍いりかはりて、大裏を守護し、火災の難を止て、朝敵を中途にたばかり出、誅戮すべき（一八四頁）

逆臣誅伐は容易だが、新造の皇居にもし火が掛かるようなことがあれば、朝家の大事となるろう。そこで、偽って退却すれば、凶徒はきつと内裏から進攻するだろうから、その際に官軍が内裏に入り守護すれば良いだろうということになった。この勅定を受け、六波羅からは重盛・頼盛等が大將軍となり、大宮面に押し寄せたとする。その様子は、次のように記される。

・軍は巳の刻の半より矢合せして、たがひにしりぞくかたなく、一時計ぞたゝかひける。（一八七頁）

先の勅定の趣は忘れられたかのように、両軍は互いに退くことなく、一時ほど戦いは続いたとする。さらに待賢門を破った重盛率いる五百余騎は、大庭の樗の木のもまで攻め寄せるが、わずか十七騎率いる悪源太義平により、大宮面に再び追い出されたとする。その退却

は、義平の攻勢により追い出されたのであり、決して偽りの退却ではなかった。

・悪源太は一人当千のこれらをあいぐして、馬の鼻をならべてさんぐにかくりければ、重盛の勢五百余騎、はつかの勢にかけ立られて、大宮面へばつと引でぞ出たりける。(一八八頁)

しかし、重盛も「偽りの退却」をとの勅定を忘れていたわけではなく、次に見るようなおかしな弁明を行って、再度大内裏の中に駆け入っている。

B いったりて引きしりぞくべきよしの宣下を承つたる身なれども、合戦は又、時宜による也。はつかの小勢にうちまけてひきしりぞく事、身にあたりて面目をうしなへり。いま一駆け懸て、その後こそ勅定のおもむきにまかせめ(一八九頁)

そして、新しの五百騎を率いて重盛は待賢門を破り大内裏の中に駆け入ったものの、再び義平により、大宮大路へ追い出されている。今度も、偽りの退却ではなかった。結局、大内裏内での合戦は行われたとするが、待賢門前での合戦は描かれていないことになる。

一方、郁芳門前では、左馬頭義朝と三河守頼盛とが対峙していたが、義朝勢九騎が頼盛勢十騎の中に攻め懸かり、さらに義朝が二百余騎の勢を具して駆けだしたところ、

・三河守の大勢、馬の足をもためず、三手になりてぞ引たりける。(一九〇頁)

と記す。結局郁芳門前でも実質的な合戦は行われず、頼盛勢も退却したとする。もちろんこの頼盛の退却も、偽りの退却のように描かれていない。

そして、これらの記事に続いて、次の記事が記される。

C 大内は、元来、究竟の城郭なれば、火をかけざらん外はたやすく攻めおちがたかりしかば、敵をたばかり出さんがために、官軍、六波羅へむかひてひきしりぞく処に(一九〇頁)

A では、火災の難を憂えての偽りの退却であったのだが、C では、大内は難攻不落の城郭故、火を掛けなければ落としがたいため、偽りの退却で敵を誘き出そうとしたとする。A とC を整合的に読もうとすれば、A の場合も、官軍方が敵を落とすために火を掛けなくてもすむように、偽りの退却をして敵を誘き出そうとしたと読むことになるが、A をどのように読むとしても、これまでの大内裏内での合戦譚は、必ずしも大内が、「究竟の城郭」とは言えなかったことを記すものでしかなかった。最終的には義平により重盛は大宮面に追い出されているが、待賢門は、二度にわたって官軍の侵入を許し、大庭まで攻め込まれているのである。このように一類本本文内では、A とC、それにその間に挿入された待賢門の合戦譚とは、有機的な形で接続してはいないのである。

同様のことは、これ以下の本文の展開においても言いうる。続く重盛の合戦譚の冒頭は次のように記される。

D 重盛は、しばらく合戦して、敵をたばかり出し引しりぞく。悪源太、勝にのりて追つかければ、重盛の馬の草わき・太腹を籠深に射させ、馬しきりにはねければ、堀川の材木の上、下立ったり。(一九一頁)

ここでも、重盛は、偽りの退却をしたと記す。確かに、「しばらく合戦して、敵をたばかり出し引しりぞく」まではそのように読める。

しかし、その後は、義平の攻勢に堪えかねて、重盛は、二人の郎等与三左衛門尉と進藤左衛門尉の死と引き換えによって、命からがら逃げ出したのである。

・二人の郎等が討死しけるあひだにぞ、重盛、はるかにのびにける。

(一九二頁)

続く平頼盛の場合も同様である。

・三河守頼盛は、中御門を東へひきけるを、鎌田が下部、腹巻に熊手もちたるが、よげなる敵と目をかけてはしりより、甲に熊手なげかけて、ゑひ声をあげてぞひきたりける。三河、ちつとも傾かず、鎧ふんばりついたちあがり、左の手にては鞍の前輪をかゝへ、右の手にては抜丸と云太刀をぬき、熊手の柄をぞきりてンげる。熊手ひきける男は、のけにまろぶ。三河守は、つつとのびにけり。……三河守も、すでにうたれぬべく見えけるに(一九二―一九三頁)

傍線部にも見るように、頼盛の場合も、意図した退却ではなく、「すでにうたれぬべく見え」た中で、必死の退却であった。さらにこの後、頼盛の郎等藤内太郎の討死記事の後に、

・藤内太郎討死の後、三河守の勢も、たゞ引にこそひきたりけれ(一九四頁)

と記されるが、やはりここでの退却も偽りの退却というようには読みがたい。

以上のことは、再度次のように記される。

・平家(の)兵、返合く、所々にて討死しけるあいだに、左衛門佐も三河守も、六波羅へこそつきにけれ。「与三左衛門・進藤左衛門、二人の侍なかりせば、重盛いかでか身を全せん。抜丸なかりせば、

頼盛、命延がたし。二人の郎等・二腰の太刀、いづれも重代の物は、やうありけるぞ」と、見る人感じ申ける。(一九六頁)

重盛の六波羅への生還は、二人の郎等の討死があつて可能となつたものだし、頼盛の場合も、抜丸あつてこそ生還であつたことが強調されている。

さらに、六波羅合戦に続く記事では、それまで日和見していた源兵庫頭頼政が官軍方につき、伊藤武者景綱・筑後守家貞等新手の五百余騎が近づくのを見た義朝等が、やむなく退却するのを見て、六波羅の官兵共は、次のように義朝等を挑発したとする。

Eわれら内裏より引退し心は、只今、思ひしれ。など返しあはせぬぞ(二〇五頁)

このように、一類本『平治物語』では、AとEに見るように、官軍となつた平家は、信頼や義朝等の軍勢を内裏から追い出すために、偽って退却した所、彼らはまんまとその策略に引っかかったとする記事を五箇所にわたって点綴する。しかし、先にも指摘したように、大内裏内での合戦や、大宮面から六波羅に退却する際に繰り広げられた重盛や頼盛等との合戦話は、必ずしもそうしたAとEの本文と有機的に連接していないことを見てきた。その場合、「待賢門合戦」とは、いっても、門前での実質的な合戦は描かれず、実際は、大内裏内での合戦と、大宮面から六波羅に退却するまでに繰り広げられた合戦とに分けられる。その内の大内裏内での合戦は、谷口が指摘するように虚構と考えられる。二度にわたって繰り広げられる合戦は、いずれも重盛率いる新手の五百余騎を相手に、義平が僅か十七騎で大宮面に追い出すという非現実的な話であるのに対して、六波羅へ退却するまでの

合戦譚は、その中の重盛の合戦譚が次に引く『愚管抄』に載るように、その多くは事実に基づく合戦話であろうと考えられる。

・平氏ガ方ニハ左衛門佐重盛〈清盛嫡男〉・三河守頼盛〈清盛舎弟〉、コノ二人コソ大將軍ノ誠ニタ、カイハシタリケルハアリケレ。重盛ガ馬ヲイサセテ、堀河ノ材木ノ上ニ弓杖ツキテ立テ、ノリカヘニノリケル、ユ、シク見ヘケリ。鎧ノ上ノ矢ドモオリカケテ各六波羅ニ参レリケル。〔『愚管抄』二三五頁〕

次に金刀比羅本を見てみよう。金刀比羅本でも、先ず六波羅で公卿僉議があり、次のような勅命が下されたという。先の一類本で見たAに近似する記事である。

F 皇事もろきことなければ、逆臣ほろびん事うたがひなし。但新造の皇居、よく思慮あるべきか。廻録の災あらば、朝家の御大事たるべし。官軍いつはりて引退ば、凶徒たちまちにすゝみでんか。其時官軍を入替て皇居を守護せば、火災あるべからず。〔二二三頁〕

新造の内裏を火災から守るため、官軍が偽って退却すれば凶徒はそのまま進み出るだろうから、その時に官軍が入れ替わって内裏を守護すれば火災の心配はないだろうとの勅命であった。その後の展開は一類本に近似する。五百余騎率いる重盛が大庭の椋の木まで攻め寄せ、十七騎の義平勢に大宮面まで押し戻されるといふ展開は同じである。但し先の一類本では、Bに見るように、重盛は、僅かの小勢に押し返されたことを恥じ、「いま一駆け懸て、その後こそ勅定のおもむきにまかせめ」と言って、再度大内裏内に攻めかけたとする。その点、金刀比羅本では、次のように記す。

・十七騎にかけ立られて、五百余騎かなはじとや思ひけん、大宮面へ

ざと引。左衛門佐重盛弓杖つゐて、馬のいきをつかせ給ひしかば、筑後守家貞、「曩祖平將軍の再生をあらため給へる君かな。」と向さまにほめられて、今一懸して家貞にみえんとや思ひけん、前の五百余騎をとゞめ、あられて五百余騎をあひぐして、又大庭の椋の下まで責よせたり。〔二二六頁〕

つまり、金刀比羅本では、家貞の言に見るように、重盛は攻めも攻めたり、また義平も守りも守ったりと、両者を称揚することにより、一類本に見たような、重盛に辻褃の合わない弁解をさせて再度攻めかけさせるといふ物語構成を改めたと考えられる。その後の、六波羅めがけて逃げる重盛に対して追い駆ける義平という構図は一類本に同じである。しかし、一類本の場合は、義平の攻勢に堪えかねて、重盛は、二人の郎等与三左衛門尉と進藤左衛門尉との犠牲によって、命からがら逃げ出したのであったが、金刀比羅本の場合は異なる。

・鎌田重盛によりあひくまんとしけるが、主をうたせじと思ひ、新藤左衛門により合、三刀さしてくびをかき、悪源太を助けり。此ひまに重盛は力およばず景泰が馬にうちのり、六波羅へおちのびらる。二人のさぶらひなくは重盛も助かりがたし。鎌田兵衛なくは悪源太もあやうくぞみえられける。〔二二八―二二九頁〕

重盛の場合は、与三と新藤の命を賭しての働きにより助かり、義平の場合も鎌田の働きにより、共に命を救われたとする。一類本の場合、偽りの退却とは言いながらも、一方的な退却としてしか読めなかったのであるが、金刀比羅本の場合は、双方奮戦の中での重盛の意図的な退却としても読める余地を残しているのである。

同様のことは、続く頼盛の合戦譚についても言いうる。一類本では、

頼盛は、「すでにうたれぬべく見え」（一九三頁）たのだが、抜丸のおかげで命拾いをした。「抜丸なかりせば、頼盛、命延がたし」（一九六頁）と記すとおりである。同様の場面を、金刀比羅本は次のように記す。

・三河守すでに引落されぬべうおはしけるが、抜丸をもつてしと、うたれければ、熊手の柄をともより二尺ばかりをきて、つときり、熊手をきられて、八町二郎のけに倒亭、三ころびばかりころびける。

京童部是をみて、「あッばれ太刀。三河守もよつきり給けり。八町二郎もよつびきたり。」とぞ咲ける。甲に熊手をきりつけながら、取てもすてず、見もかへさず、三条を東へ、高倉を下に、五条を東へ、六波羅までからめて落られければ、中々優にぞみえられける。

（一三〇頁）

傍線部分に見るように、太刀ばかりでなく、熊手を切った頼盛も、熊手を打ちかけ引張った八町二郎もともに、やりもやったりと称讃される。やはり、頼盛の場合も、一方的な退却ではなく、敵を誘い出すための退却であったとも読める余地を残しているのである。

六波羅に引き返した場面では、待賢門合戦は、次のように総括される。  
G公卿僉議にしたがつて、平家みな六波羅へ引かへせば、源氏大内うちすて小路くをひかけ、こゝかしこにて責戦。官軍大内へ入替て門々を防がせければ、源氏内裏へいりかねて、六波羅へぞよせにける。（一三三頁）

かねての手はずどおり、義朝等を大内裏から誘い出した後、平家は内裏へ入って門を閉じたため、源氏は戻ることでもできず、六波羅へ寄せたとする。このように金刀比羅本では、FとGの記事は呼応し、そ

の間に挿まれた重盛や頼盛の合戦譚は、それらの記事とそれぞれ有機的な関係を構築していると言えよう。に対して、一類本には、Gに該当する記事はなく、義朝等が外に出た後の内裏がどうなったかについては、Aの記事を持つにもかかわらず、全く触れることはない。

#### 四 まとめ

以上本論で考えたことは、以下のとおりである。

一 為朝と山田小三郎との一騎討ちを、『保元物語』の半井本や金刀比羅本では、暗闇の中でのこととし、内甲も確認しえない程の暗さの中での合戦とするが、実際の合戦は夜明け方に近い頃に行われたと考えられる。内甲も確認し得ない夜陰の中での一騎討ちという趣向は、『保元物語』の為朝と山田小三郎との一騎討ち譚独自のものと考えられる。

二 『愚管抄』の記事を対照させて読めば、『保元物語』諸本の記す為朝と政清や、為朝と義朝との合戦譚には、かなりの虚構が加えられていることが確認できる。さらに、平基盛等と崇徳院方に向かう宇野七郎親治等との合戦譚にも、虚構が加えられていることが、『兵範記』保元元年七月六日条により判明する。

三 谷口耕一によれば、『平治物語』が記す大内裏内での重盛と義平との攻防戦は虚構の可能性が高いように、『愚管抄』によれば、待賢門合戦そのものが、虚構である可能性が高いと言えよう。実際の合戦は、いち早く大内裏を飛び出した義朝軍等が、六波羅を出て大内裏に向かっていった官軍を蹴散らし、六条河原にまで攻め込んだと

というのが実情ではないか。

四 一類本『平治物語』では、官軍となった平家は、義朝や信頼等の軍勢を内裏から追出すために、偽って退却した所、彼らはまんまとその策略に引っかかったとする記事を五箇所にわたって点綴する。しかし、大内裏内での合戦や、大宮面から六波羅に退却する際に繰り広げられた重盛や頼盛等との合戦譚は、必ずしもそうした本文と有機的に接続していないことを見た。に対して、金刀比羅本では、官軍の平家は、かねての手はずどおり、義朝等を大内裏から誘い出すため重盛や頼盛は偽りの退却を繰り返したと記す。それらの合戦譚は、一類本に見るような敵方の攻勢による重盛や頼盛方の一方的な退却かのように読めるようなものでなく、敵も味方も攻防を繰り返す中で、官軍方の意図的な退却として読める余地のある記事構成をしていることを確認した。

## 注

- (1) 小林賢章『アカツキの研究 平安人の時間』(和泉書院二〇〇三・二)
- (2) 底本「ナランカヤウ」の「カヤウ」の横に「カヤウニ」と傍記。新大系は、文保本「イカテ八郎ノ矢ナランカラニ、冑武者一人ヲハトヲランソ」により、「八郎ノ矢ナランカラニ冑武者一人ヲバ通ランゾ」と訂す。「八郎の矢なのであるらう、(だから)このように鎧武者一人を射通したのであるらう。きっと矢番いが早く、ましてや暗紛れで、二本の矢を一本の矢と見たのであるらう」の意と解した。
- (3) 文保本は、中巻のみの零本のため、上巻に位置する①の記事は欠くが、他②③④はいずれもあり。なお、文保本文は、伝承文学資料集第八輯『鎌

倉本保元物語』(三弥井書店一九七四・12)による。

- (4) なお、物語の中でも、「安芸守ノ中ニハ、弓矢取ニハ許サレタル男也。強弓精兵ノ者也」「申所、矯筋虚誕ニハ無リケリ」(半井本五一頁)と記され、為朝にも「為朝程ノ者ヲ取テ懸ハ、手本ノ覚ル者」(同前五二頁)と言わせた山田小三郎の射た矢は、半井本では、「弓手ノ草摺、ヌキ様ニシタ、カニコソ通タル」(五三頁)と記され、文保本では、鎧の左脇に該当する「クケイノ板ヌイサマニコソトヲリタレ」(二〇二頁。なお、半井本と同じ「弓手ノ草摺ヌイサマニコソトヲリタレ」の傍記あり)と記されるように、為朝の内甲の近くに当たっていない。に対して、京図本や金刀比羅本では、山田小三郎の射た矢は、首の真横を守るための「しやうじの板を縫さまにした、かに」(金刀比羅本一〇四頁)当たり、「今少あがりたらましかば、頸の骨何かはあらまし。あぶなかりし事ぞかし」と記される。こうした山田小三郎像には、その前に記される伊藤景綱、五郎・六郎兄弟達との対比も意識されているようである。例えば、京図本では、伊藤五の放った言葉は「へいしのらうどうのはなつやは、げんじの御身にたつつかた、ざるか」と勇ましいものの、放たれた矢は、「まことに伊勢国にて矢はいたりけん、日向さまへそれで行」(二八頁)と、為朝に当たるところか、伊勢の祭神が天照大神だからというわけか、太陽めがけて飛んでいったと記すように、山田小三郎の場合とは対称的である。それは金刀比羅本でも同様で、伊藤達は、一矢を射ることもなく、先に為朝に射抜かれている。この為朝対伊藤兄弟の合戦譚で注意すべきことは、半井本・文保本では、伊藤景綱の射た矢は、「御曹司ノネリツバノ太刀ノ股寄」(半井本四八頁)に当たったと、他諸本に比べて最も好意的に記されているが、注意すべきは次に続く記事である。「五十余騎方矢前ヲ調ヘテ放ツ矢ハ、一モ敵ニ立ザリケリ」(四十八頁)。すなわち、この話の冒頭に、「去程ニ、清盛、三条ヲ川原へ打出デ、スデカヘニ東川原へ打渡テ、堤ヲ上リニ寄セケルニ、伊藤武者景綱、五十騎計ノ勢ニテ、先陣ニ勸テ申ケルハ」(四六頁)とあったように、一見為朝と伊藤親子との一騎討ちかのように見えるこの話は、実は集団戦の中での一齣の話

として記されていたのである。それは、一騎討ちかのように読める金刀比羅本にも、「伊藤武者景綱、三十騎計を相貝て門近くす、みよりて」（九九頁）とあり、流布本にも、「安芸守は、二条河原の川より東、堤の西に、北へ向てひかへたり。その勢の中より、五十騎計先陣にすゝんで推よせたり」（三六二）として、次に伊藤親子の名乗りを記すことから明らかであると考えられる。続く山田小三郎と為朝との一騎討ちの話は特異な例であり、基本的には集団戦の中での一騎討ちは普遍的なものではなかったと考える。

(5) 元木泰雄『保元・平治の乱を読みなおす』日本放送出版協会二〇〇四・一六頁。

(6) 谷口耕一「平治物語の虚構と物語―待賢門の軍の事」の章段をめぐって―『語文論叢』二二、一九九四・11。

(7) 中公バックス 日本名著9『慈円 北畠親房』中央公論社一九八三・9。

(8) 河内祥輔『保元の乱・平治の乱』吉川弘文館二〇〇二・6。

(9) 元木泰雄『保元・平治の乱を読みなおす』日本放送出版協会二〇〇四・12。

(10) 研究会当日の私の発表に対して（二〇〇四年四月二十五日に開催された三三〇回例会「企画 平治物語研究の検証と展開―目下力著『平治物語の成立と展開』を繙く―」における私の発表『平治物語』成立論の検証―待賢門の軍の事・光頼卿参内の事―、会場からいくつかの批判をいただいた。その時の様子を伝える、当日の司会を務めた久保勇に、次のようなまとめがある（『軍記と語り物』四一、二〇〇五・3）。

・ 早川氏の提示した前者の問題（早川注：「待賢門の軍の事」の「虚構」の程度を見直す問題提起）では、大内裏の荒廃が進んだ一三三〇～四〇〇年代に発揮された平治作者の想像力という目下論に対し、待賢門合戦全体を虚構化する、より拡大した枠組みにおいて捉え直す必要性を主張している。ただ、早川氏が提示した『百鍊抄』『愚管抄』等から、やはり六波羅合戦以前の両軍衝突の事実を認めるべき史料解釈も会場から発せら

れている（櫻井陽子氏・佐伯真一氏・鈴木彰氏）。

本論は、注(10)に記したように、二〇〇四年四月二十五日に開催された軍記と語り物研究会三三〇回例会で発表したものによって、今回原稿化するにあたり、第一章を新たに付け加えた。